根津朝彦著『戦後『中央公論』と「風流夢譚」事件――「論壇」・編集者の思想史』（日本経済評論社・二〇一三年）

宇野田　尚哉

一

ここで取り上げるのは、近年戦後日本の思想史・ジャーナリズム史の研究に精力的に取り組みつつある気鋭の若手研究者の最初の単著である。まずは同書の目次を示しておく。

序　章　「論壇」研究の問題設定と意義
第一章　戦後ジャーナリズムにおける「論壇」史
第二章　『中央公論』の天皇制論から「現実主義」論調まで
第三章　中央公論社と「風流夢譚」事件
第四章　『中央公論』の編集者群像
終　章　総合雑誌・編集者が残した遺産

同書が分析対象とするのは、「一九四五年から七二年までの戦後「論壇」、なかでもとくに『中央公論』である（一頁）。「なぜ対象時期を一九七二年までとしたのか」というと、「時代状況」の面でも『中央公論』の編集体制の面でも一九七二年頃が「節目」「区切り」であるからとされている（二頁）。

同書が着目するのは、「中央公論社と「論壇」に激震を走らせた「風流夢譚」事件」（一頁）と、「知識人に比べて従来注目されなかった編集者」（一頁）である。同書が『中央公論』を主な分析対象とする理由は、「風流夢譚」事件の発端となったのは同誌であったことと、他の総合雑誌と異なり同誌だけが「編集者の交代陣容をほぼ全員把握できる」こととの、二点である（一～二頁）。

同書の序章から課題の設定に関わる言葉を引くと、次のようになる。「戦後日本において総合雑誌を中心とする「論壇」とは何だったのか。本研究は『中央公論』の誌面研究と編集者の群像を通して戦後ジャーナリズム史上の「論壇」と総合雑誌の位置づけを解明することを課題とする」（一頁、冒頭の一節）。「戦後、知識人の影響力が最盛を迎える一九六〇年の安保闘争の後になぜ「論壇」が急激な変容を見せたのか。本研究は……編集者に焦点をあて……戦後「論壇」に果たした『中央公論』と編集者独自の役割を明らかにする」（一頁）。「知識人の最盛期は六〇年安保闘争の時であったとよくいわれる。……「風流夢譚」事件が「論壇」の変容、すなわち総合雑誌の衰弱にどのような影響を及ぼしたのか。わずか半年ほど前に知識人の最盛期を迎えたとするならば、なぜ急速に弱体化を見せたのか、その点を「風流夢譚」事件に関係づけて明らかにしたい」（二～三頁）。同書序章の叙述は、そこで設定されている諸課題の階

層性や相互連関がわかりにくいという難点を抱えているが、あえて私なりに同書の課題を整理するなら、次のようになる。

・『中央公論』を主な分析対象としつつ、戦後ジャーナリズムにおける「論壇」・総合雑誌の位置づけを明らかにする。第一章に対応。

・総合雑誌『中央公論』とその編集者が戦後の「論壇」において果たした役割を明らかにする。第二章・第四章に対応。

・六〇年安保の際に最盛期を迎えたとされる戦後「論壇」・総合雑誌はいかにして衰退したのかを「風流夢譚」事件を手がかりとして明らかにする。第三章に対応。

以下では、各章の内容を簡単に紹介し、その成果を確認したうえで、五点にわたって評者のコメントを付することとしたい。

二

まず、第一章では、『朝日新聞』『毎日新聞』『読売新聞』の論壇時評と代表的な総合雑誌『世界』『中央公論』『文藝春秋』をあわせて分析することにより、「戦後の「論壇」史」（一三頁）が描かれる。

敗戦後、まず『文藝春秋』が再刊（一九四五年一〇月号）され、ついで一九四六年一月号で『中央公論』『改造』が再刊、『世界』『展望』が創刊されるが、『展望』は一九五一年九月号で、『改造』は一九五五年二月号で休刊となる。同書は、『世界』『中央公論』『文藝春秋』の「三誌を中軸とする「論壇」の布置が固まるのが……五五年」（三二頁）であるとし、これを「「論壇」の五五年体制」（三〇頁）と読んでいる。『世界』と『文藝春秋』を両翼とする三誌の位置がはっきりしてきたのは、これに先立つ講和論争を通じてであった。なお、前掲三紙に論壇時評が定着するのは、一九五〇年代後半のことであると指摘されている（三四頁）。

その後、「一九五六～五八年にかけて『中央公論』を中心として一群の新しい執筆者が登場する」（三五頁）とともに、安保闘争期には『世界』が大きな反響を呼ぶ（四〇頁～）。その後には『文藝春秋』が商業誌化して「「論壇」誌としての存在感を失っていく」（五〇頁）とともに、「風流夢譚」事件を契機として『中央公論』の論調が「現実主義」化していく（四九頁～）。そして一九七〇年には「「論壇」の変容を論壇時評で指摘する発言」が「頂点を極め」（七〇頁）、「消費社会化」（七四頁～）が進むなか「「論壇」の一つの終焉が確認された」（三二三頁）とされる。

以上のような内容の第一章は、既存の理解を一新するような啓発的な叙述ではないが、戦後日本の言論空間についての既存の大まかな理解を具体的材料に基づいて確かなものとしてくれる啓蒙的な叙述として貴重なものである。

第二章では、『中央公論』の論調の変化が追跡されている。この章の重要な点は、一九五〇年代には「ミッチー・ブーム」期の天皇制論（一〇一頁～）のように批判性のある多様な議論

を掲載していた『中央公論』が、「風流夢譚」事件を契機として「現実主義」化していくさまが、具体的に追跡されているという点である。

評者にとっては、「『中央公論』に掲載されたルポルタージュとジャーナリストの系譜を追」（一〇七頁）った同章第二節の叙述、なかでも「藤島宇内・丸山邦男・村上兵衛の共同ルポ」（一一三頁～）の項目が特に興味深かった。「ヒロシマ――その後十三年」（一九五八年八月号）や「在日朝鮮人六十万人の現実」（同年一二月号）のような彼らのルポが『中央公論』に掲載されたのは、たまたまではなく、当該期の『中央公論』の編集方針の帰結としてであると知っておくことは、当該期の『中央公論』を考えるうえでとても重要なことであろう。六〇年代以後のイメージを投影するかたちで五〇年代の『中央公論』を捉えてはならないという点を自覚化できたことは、評者にとって大きな収穫であった。

第三章では、「風流夢譚」事件・嶋中事件から『思想の科学』天皇制特集号廃棄事件を経てさらにその後へと至る流れが詳細に追跡されている。ここで明らかにされているのは、「中央公論社の自主規制の形成過程」（一五一頁）であり、この過程に対する著者の次のような評言は、おおいに首肯されるものである。「一般的に『中央公論』の論調の変化は、嶋中事件後であったというふうに思われがちであるが、……「風流夢譚」掲載後から大幅な自主規制の路線が進行していた。他のメディアを含めて賛否両論、作品や天皇制に関する議論をするまでの時間的余裕を確保するまでに中央公論社が示した「総敗北」はあまりにも早すぎた。畑中繁雄が総合雑誌の生命線と考えた現実批判の役割を負えなかったことが、「言論の自由」の内在化を妨げる歴史的な分かれ道となったのである」（三三〇～三三一頁）。同書は、早々に「総敗北」を受け入れてしまった中央公論社の弱さが、のちの「論壇」衰退の重要な一因になったと示唆しようとしていると言えよう。

第四章では、「『中央公論』の編集者群像」が追跡されている。ふつうは総合雑誌の編集者の思想を追おうとしてもなかなかすべがないわけであるが、『中央公論』の場合は、「風流夢譚」事件後に退社した当事者の京谷秀夫・中村智子にはそれぞれ『一九六一年冬』（晩聲社、一九八三年）・『「風流夢譚」事件以後――編集者の自分史』（田畑書店、一九七六年）という著作があり、「風流夢譚」事件後に『中央公論』の編集を担った粕谷一希には『中央公論社と私』（文藝春秋、一九九九年）という著作があるなど、例外的にそのような作業を可能にする条件がある。加えて、著者は、元『中央公論』編集者などからの聞き取りを重ねて、そのような作業を肉づけしている。

同書の叙述は、「『中央公論』編集者の思想に関しては」、「嶋中事件前は京谷が、事件後は粕谷がその編集者の在り様を代表すると考え」て、「京谷秀夫と粕谷一希の二人を軸としている」（四頁）。前述したように、『中央公論』の論調は「風流夢譚」

事件以前と以後で大きく変化するが、同書は、その背景に編集者の思想の違いがあったこと、また、事件後の変化も無節操な変化ではなく粕谷の思想的文脈があっての変化であったこと、そしてそのなかから「現実主義」の論調が生まれてきたのであることなどを明らかにしている。

このような作業が可能な事例を見出し、積極的に聞き取り調査を行って、総合雑誌の編集者の思想と誌面の変化を関係づけて論じたこの第四章は、総合雑誌の研究に新生面を開くものであると言えよう。

三

以下、五点にわたって評者のコメントを付す。

(1)同書の扱っている対象には、①戦後「論壇」→②その主要な担い手の一つとしての総合雑誌『中央公論』→③『中央公論』を通じて戦後「論壇」を考えるための手がかりとしての(a)「風流夢譚」事件と(b)編集者の思想、という階層性があると考えられる。同書のもとになった博士論文のタイトル「戦後「論壇」における『中央公論』のジャーナリズム史研究――「風流夢譚」事件と編集者の思想を中心に」(三七八頁)は、この階層性を自然なかたちで反映していると言えるだろう。一方、同書のタイトルはどうかと言うと、③(a)が主題に格上げされる一方①が副題に格下げされていて、階層性の混乱が生じている。また、同書の序章は、この点が十分に整理されないまま書かれている感が強く、設定されている諸課題の階層性や相互連関がわかりにくくなっている。評者はあえて「風流夢譚」事件を表立てる必要はなかったのではないかと感じるが、あえて「風流夢譚」事件を表立てるのであればそのことについての説明がもう少し必要であっただろう。

(2)第一章は、「戦後ジャーナリズムにおける「論壇」史」と題されてはいるものの、実際の叙述は戦後「論壇」史の内在的分析という性格が強く、戦後の日本において「論壇」は隣接する諸領域とどのような関係を持ちつつジャーナリズム全体のなかでどのような位置を占めていたのかとか、より広く社会のなかでどのような機能を果たしていたのかといった点についての叙述は弱かったように思う。この点は、同書が今後の「最大の課題」として「読者論」を挙げていることとも関係していよう(三四二頁)。

ところで、近年の研究状況にあっては、占領期の新興新聞や左翼評論誌、朝鮮戦争前後のサークル誌や一九七〇年前後のミニコミ誌といった、多様なメディアが関心を集めつつある。これらは、小規模ではあるけれども地域性や立場性のはっきりした〈顔の見えるメディア〉であり、そうであるがゆえにそれらを分析することで見えてくるものも多い。では「論壇」を分析することで見えてくるものとは何なのか。総合雑誌に載った論説はどこでどのようにしてどのような意味を持ったのか。「論壇」や総合雑誌が当該期に意味を持ったその持ち方は必ずしも

自明ではないとするなら、「論壇」や総合雑誌についてもそのような問いが立てられてしかるべきだったのではないかと思われるし、近年の研究状況との接合を考えるなら、むしろそのような問いこそが立てられるべきだったのではないかと思われる。

(3)第二章について言えば、『中央公論』における戦前・戦中から戦後への人的・思想的連続性も考えておく必要があったのではないだろうか。戦後再建第一号の編集兼発行者が蠟山政道であり、「風流夢譚」事件後の「現実主義」の首唱者が高坂正堯であったことを考えると、日中戦争期から太平洋戦争期にかけての戦時広域圏論、具体的に言えば「東亜協同体論」や「世界史の哲学」との関係は、少なくとも考えておく必要があっただろう。たとえば、朝鮮戦争下の一九五一年一月号で組まれた特集「アジアのナショナリズム」(特集冒頭の論説は蠟山執筆)や、中国の核開発を踏まえて米中対立のもとでの日本のあり方を構想した高坂正堯「海洋国家日本の構想」(一九六四年九月号)などは、戦時期とはまったく異なる国際環境のもとで書かれてはいるものの、広域的な地域秩序への関心に立って書かれているという点では戦時期以来の系譜を引いているとも考えられ、前述したような視角から再検討しておいてもよかったのではないかと思われる。

また、次に述べることとも関わるが、「風流夢譚」事件を表立てて立論するのであれば、戦後の中央公論社が横浜事件をどう受けとめていたのかを明らかにしておくことは、是非とも必要だったのではないだろうか。この点への言及がないため、「風流夢譚」事件に際しての中央公論社の弱さの歴史性がわかりにくくなってしまっているように評者には感じられた。

(4)第三章について言えば、右翼のテロとそれに対する言論人・言論機関の対応の不十分さを「論壇」衰退の重要な一因として指摘するのであれば、やはり浅沼稲次郎社会党委員長刺殺事件や、その実行犯の少年をモデルとしたため右翼の抗議を受け掲載誌(『文学界』)が謝罪するに至った大江健三郎「セブンティーン第二部・政治少年死す」の問題などにも立ち入らざるをえないだろう。同書では、「風流夢譚」事件以後の中央公論社内部の動きや、同事件に対する知識人の反応は取り上げられているが、一九六〇年五~六月に高揚した安保闘争へのバックラッシュとしての同年一〇月以降の右翼テロが総体として捉えられているわけではないし、それに対する言論人・言論機関の対応も総体として捉えられているわけではない。このあたりを総体的に捉え、当該期の社会における緊張関係のあり方を明らかにしたうえでないと、同書の指摘する通り中央公論社の対応に問題があったのは確かであるとしても、右翼のテロと「論壇」の衰退とを筋道立ったかたちで結びつけるのは難しいのではないだろうか。中央公論社の個別具体的な事例と「論壇」の衰退という大きな状況とを説得的につないで叙述するためには、もう何段階か手続を踏む必要があったように思われる。

(5)先にも何点か挙げた通り、『中央公論』の元編集者たちは、

退社後に回想録等を少なからず著している。この点は、他の総合雑誌と比べた場合の『中央公論』の特徴であり、本書第三章・第四章では、それらの回想録等と筆者による聞き取りが重要な資料的基盤となっている。ただ、第三章・第四章に限らず本書全体を通じてやや疑問に感じたのは、回想録や聞き取りの資料批判はどのように行われたのか、という点である。回想録の内容がその書き手の当時立たされていた立場や知り得た情報に規定されるのは当然のことであり、聞き取りの場合も同様である。本書では、回想録や聞き取りがはらんでいるであろうそのようなバイアスをどう処理するのかの説明がないままそれらの資料が使われているという感があり、やや危惧を感じた。この点については序章であらかじめ説明しておいたほうがよかったのではないかと思われる。

以上、五点にわたってコメントした。同書の成果をより確かなものとしつつそれを踏まえた次の展開を見通すうえで読者の参考になれば幸いである。

ところで、「論壇」の「終焉」が「確認」された年の翌年、『朝日ジャーナル』一九七一年三月二六日号は、「ミニコミ'71——奔流する地下水」という特集を組んで、「全国ミニコミ一覧表」を掲載し、膨大な数のミニコミ誌を紹介している。この「地下水」というメタファーは、一九五〇年代後半に思想の科学研究会が『中央公論』に連載したサークル雑誌時評「日本の地下水」を想起させるが、〈地上〉で総合雑誌が衰退していった時期というのは、じつは〈地下〉でサークル誌からミニコミ誌への移行が起こった時期でもあるのである。著者と違って評者の関心はどうしても〈地下〉のメディアのほうに向かってしまうのだが、たとえば、この二つのプロセスを一つの視野におさめるにはどうすればよいか、といった問いを著者と共有することは可能であるように思われる。たとえばそのようなかたちで本書の成果を開いていくことは、読者の役割であると同時に、著者自身の役割でもあるだろう。本書を一つのきっかけとしてメディア論的な観点からの戦後思想史の研究が活性化することを期待したい。

（大阪大学准教授）